

# 至誠

明治神宮武道場  
至誠館 館長

荒谷 卓

今、わが国を含む経済的な新自由主義の世界で、当たり前のように認識されている「自由」の概念やその実態について考察してみたい。

通常、新自由主義の世界では、法律的な枠組み、制度的な枠組みを作ることによって「自由」を確保している。法律を破って自由になるのではなく、法律や制度を作つてその中で自由競争を正当化できる枠組みを確保しているのである。これは言い換えれば「一定のルールの中で自由を認めているに過ぎない。ルールというものは一見平等そうに見えるが、現実の世界では均一には働

かない。とりわけ経済的な意味での自由のルールとは、現実には富の力を得た者に有利なルールとなるため、貧困層は自由を奪われることになる。

消費税を例にとつて考えてみよう。消費増税の議論が進んでいるが、富める権力者たちは「直接税の方が公平で平等だ」と主張してルールを設定する。しかし現実の世界では、増税は、所得の低い人たちにとって死活問題となり、生存の自由さえ奪われる。他方、富める権力者は税を回避する巧妙な仕組みを常に準備し、無制限の財産獲得の自由を手に入れる。そもそも、今回の

消費税そのものが、富裕層の減税分を貧困者が負担する仕組みになっている。なぜ武道は死生観の超越をテーマに据えるのか

別の視点から自由について考えてみよう。現代は、極めて表層的な要求が満たされることも、一般的には自由だと考えられがちである。今好きなことをやる我侷な欲望を満たすことさえ自由の発露のように思われがちだが、その一時的な自由を満たしたことを後で後

悔するなどという経験はないだろうか。表層の要求を満たすことを優先してしまつたがゆえに、深層にある意志の自由を侵害してしまうという経験だ。これは自分自身の深層に、無意識の「意志の自由」が存在し、その自由を侵害してしまつたがゆえに、それが後悔という形で現われるのではないだろうか。

では「意志の自由」といったときに、われわれは、どこに焦点を当てればいいのか。武道的にこの点を考えていくと、それは間違いなく死生観の超越という

テーマに行きつく。武道の世界では、こここそ自由があると考えられている。すなわち、生き死の問題を超越した時にはじめて、真の自由を獲得することが出来るという考え方である。

人間社会には、法律的な規制や商売上のルールなど、人間の行動に制限を加える様々な規制が存在する。自由とはそういった縛りから解放されることを意味するわけだが、それは極端に言えば法律を破つて得ることのできる自由である。

人がなぜ自由になれないかと言うと、そうすれば罰則を受けるとか、罰金を払わなければならない、死刑になるといったような何らかの不利を被るからであり、その不利を考慮した上で、自ら自由を抑制しているのである。

もちろんこれは法律や制度だけの問題ではない。人から批判される、日々の生活への影響があるといったことまで含めた不利益が、人間の行動を抑制するのだ。

そのような人間の自由意思を抑制させるものの中で、もっとも大きなものが「死」である。自由になりたいが、死んでしまつては元も子もない。死ぬことだけは避けたい。だから、最後に自身の自由を抑制するのは死だと言つていい。

つまり、それさえ克服できれば、予見しうる最高の自由を手に入れることが出来るというわけだ。生き死の問題を克服することに武道の主眼が置かれるのは、換言すれば、「最大の意志

の自由」を獲得することが、修行の目的になっていることを意味している。

最大の意志の自由を獲得できれば、これ以上ない自由な判断ができ、自由な行動がとれる。何者もこのような人物を拘束することは出来ないであろう。「法律があるから」、「制度があるから」などと云つているうちは、所詮与えられた自由を本当の自由と勘違いしているに過ぎない。武道の世界で言う主体的な自由の獲得とは全く次元の違うことである。

## 死を超越してこそ究極の自由を獲得することができる

死を超越した自由の立場から見れば、現在の新自由主義者たちが主張している「自由」とは、1%の富裕者の自由と99%の貧困者の不自由を形成する新たな支配構造で、本質的「自由」とは似ても似つかないものである。生き死の問題を探索する武道の鍛錬や教育は、真の意味での自由教育であると言えるであろう。

現代では多くの人々が「本質的な自由の発露」を自ら抑制しているがゆえに、本来解決しなければならぬ問題にも着手できない。

こう考えると、現代では「自由が大切だ、大切だ」と言われながら、百年二百年前の日本人と比べてよほど不自由な生活を送っているのではないかと思われ。

江戸末期から明治の時代には、生き死の問題で自分の意志を曲げることもなかった人が、現代よりも確実に多かつたのではないかと。少なくとも国政に携わり、何らかの指導的な立場に着く人々は、そうした精神の自由の旺盛な人たちが多かつたと思われる。少なくとも、そうした真の自由な人たちの政治の世界における比率が、今と比べればはるかに高かつたがゆえに、政治にもダイナミズムがあつた。そして民の力にもパワーがあつた。

よく「人権思想が自由を守っている」と思われることが多い。しかし実際には、この人権思想こそが、「与えられた自由」という概念を植え付けていると思えてならない。

そこで「与えられた自由」とは、国家や定の権力者が担保し、許可するものである。そして人民はそれを謳歌する。しかし、所詮そうした自由は、他者から担保され、許された範囲内の自由過ぎない。それに比べ、かつての日本人は、国家や特定の権力から威圧や圧力があつたとしても、それに対抗し反発するだけの自由意志を持っていた。現代では権力に文句は言つたとしても、圧力に反発してまで何かを成し遂げようという目的意識を持つていない人は少ないだろう。

日本人にはかねてから反権力思想というか、強いものに対して反発することをよしとする風土があつた。戊辰戦争の頃の新聞を見ると、一般庶民の

間でも、サムライに対して反発して、例え侍が刀を抜いても「切つて見やがれ」といつて一歩も引かない庶民の話などがよく登場した。

現代の日本でそんなことのできる人はどれだけいるだろうか。そこまでしても意志を貫こうという目的意識を持った人がどれだけのいるだろうか。

かつての日本人は、命を張つてでも守りたい価値観をしっかりと持つていた。「たとえ殺されたからと言つてその信念を曲げてなるものか」という気概があつた。それこそが、自由意思の実態としての発露である。

それと比べれば現代人は、生か死かというはるか前の段階ですでに腰が引けているような状況だ。こうして考えてみると、江戸、明治から比べて、現代ははるかに不自由な社会になったとも言える。

そうして現代の日本にあつて、武道は、本来の自由とはどのようなものだったのかを主体的に獲得することのできる数少ない手段である。

新自由主義的な「偽りの自由」から自らを解放し、人間の精神の根幹から湧き出る真の精神的自由を獲得することが、我々に求められている。

楠正成が武士の誉れとして崇められる理由は、彼が死して自ら期した忠義を貫徹したからだ。自由意思を最後まで貫くことで死を選択したからだ。武道を通じて究極の自由主義を復活させなければならない。